

「大学全入」時代における高等学校と大学との接続について

＜高大接続とは＞

大学進学希望者が高校教育から大学教育への円滑な移行ができるよう、高校・大学が連帯して責任を果たすこと。

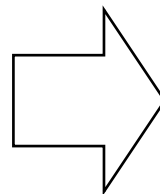
（高校）

- ・大学進学を希望する生徒の学習状況をいかに適切に評価し指導するか
- ・生徒が能力・意欲・関心にあった大学を適切に選択できるようにいかに指導するか

（大学）

- ・大学の入学者受入れ方針（アドミッション・ポリシー）の具体的な明示など、大学進学希望者が大学を選択する上で必要な情報をいかに適切に提供するか
- ・求める学生をいかに適切に見出す（選択する）か
- ・学生の入学時の情報を初年次教育にいかに適切に活かすか

○ 高校・大学は、こうしたプロセスを通じて、大学進学希望者の学習意欲を喚起することが求められる。



＜「大学全入」時代での高大接続の基本的考え方＞

◇「大学全入」時代を迎え、高大接続は、大学が「選抜」する時代から、大学・進学希望者が「相互選択」する時代へ。

収容率
90.5%
現役志願率
58.8%

- ◇「大学全入」時代は、過度の受験競争は緩和される一方、大学入試の選抜機能がもたらしてきた、
- ①「高校教育の質保証」（大学合格を動機付けとした学習効果）
 - ②「大学の入口管理」（大学合格が基礎学力の証明となる）への効果は従来ほどは期待できなくなる。
- また、
- ③ 大学進学希望者は一定の基礎学力を有する、との前提が成立しにくくなっている。

今後は、こうした認識に立った高大接続の検討が必要。

＜高校・大学の学習状況＞

○高校の現状

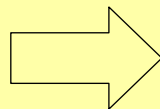
- ・学校以外の平日の勉強時間が「ほとんどなし」の高3生（秋時点）...約4割
うち大学進学者：「ほとんどなし」「30分程度」...約3割
 - ・理工系学部の大学1年生のうち、高校で数学Ⅲ・Cを履修していない
⇒理学部約3割、工学部約2割
 - ・医歯薬学部の大学1年生のうち、高校で生物を履修していない
⇒約3割
- ※また、高校では「未履修」問題が発生。

○大学生（1年生）の意識

- ・「高校のときもっと勉強しておけばよかった」...71.8%
- ・大学で「やりたいことが見つからない」...42.8%
- ・大学の授業に「ついていけない」...26.6%
- ・「可能なら別の学部・学科や大学・学校へ」...29.9%

<大学入試の状況等> (平成19年度入試)

- ・一般入試(学力検査重視)
⇒大学入学者の56.7%(H9年度:72.1%)
- ・推薦入試(学力検査原則免除、校長推薦+調査書等)
⇒大学入学者の35.7%(H9年度:26.8%)
- ・AO入試(学力検査に偏らず、書類審査+面接等)
⇒大学入学者の6.9%(H9年度: -)



- ・大学入学者の約4割が、面接・小論文で入学。(AO・推薦入試)
- ・大学の約6割が、高校教育の補習授業など高校での履修状況に配慮した取組を実施。

<高校の教科・科目の評定平均値> <選抜方法>

	推薦	AO
出願要件としている	69.7%	11.9%
出願要件としていない	44.6%	88.7%

※ 実施学部(推薦:1856学部、AO:1047学部)に対する割合

	推薦	AO
調査書等書類	79.3%	83.6%
面接	86.0%	90.0%
小論文	61.1%	29.5%
学力検査	22.5%	3.8%
討論	0.8%	10.0%
口頭試問	5.6%	7.2%



「学力担保」に課題を感じている。



AO入試を実施している学部の約6割

推薦入試を実施している学部の約5割

課題

○「高校教育の質保証」と「大学の入口管理」を入試の選抜機能に依存し続けると、高・大双方に大きな影響を及ぼす懸念。

解決の方向性

○高校・大学教育の質的改善を図る手法の確立

- ・大学入試の選抜機能に頼るだけでなく、大学進学希望者の学習を様々な客観的指標を活用して充実する。
- ・その成果を、高校における指導の充実、高校生の学習意欲の向上や、大学入試、大学の初年次教育に役立てる。

改善方策

(中央教育審議会大学分科会・学士課程小委・「高大接続」WGまとめ)

(1) 調査書の内容(一般・AO・推薦入試共通)

● 調査書の活用方法が確立していない

⇒高校の「評定平均値」や「学習成績概評」を、出願資格又は出願の目安として募集要項に明記(大学側の活用を促進するため、調査書の様式を改正。)

⇒高校は、資格・検定試験や、学校の枠を超えた教育活動なども適切に活用して、生徒の学習状況を多面的・客観的に把握し、高校教育の質的充実を図る。

(2) 入学者受入れ方針(アドミッション・ポリシー)の明確化(一般・AO・推薦入試共通)

● 「抽象的」との指摘があるアドミッション・ポリシー

⇒各大学は、高校で履修すべき科目や取得が望ましい資格などを具体的に列挙するなど最低限「何をどの程度学んできてほしいか」を明示することが必要。

(3) AO・推薦入試の改善

● 「学力不問」との指摘があるAO・推薦入試

⇒各大学は、以下の学力把握措置を少なくとも一つは講ずる。

- ① 各大学が学力検査を実施する(大学間の連携・協同による実施を含む。)
- ② 大学入試センター試験の成績を出願資格や合否判定に用いる。
- ③ 資格の取得や検定試験の成績等を出願資格や合否判定に用いる。

また、高・大が協力して、入試や高校の指導改善などに幅広く活用できる新しい学力検査(高大接続テスト(仮称))を行うことも有効な方法。今後、高・大関係者が十分に協議・研究することが必要。

(4) AO入試の実施時期の見直し

● 「青田買い」との指摘があるAO入試

⇒実施時期について、一定のルールが必要。

※4～7月に願書受付・・・151学部
合格発表・・・40学部

(5) 一般入試の改善

● 「大学全入」時代・・・「大学進学希望者は一定の基礎学力がある」との前提は困難

⇒各大学は、学力検査(科目数・出題内容)が大学教育に必要な能力・適性を把握する上で効果的なものとなっているかを検証・改善することが必要。

● 一度のペーパーテストで能力・適性を把握できているかとの指摘

⇒(1)、(2)などが必要。

(6) 情報公開の徹底

- ◆ 高大接続における「相互選択」の実効性を担保するため情報公開を徹底。
- ◆ 各高校・大学は、公表の姿勢自体が、国民の評価の対象となることに留意。
- ◆ 文部科学省は、情報公開を積極的に行うよう各高校・大学を指導するとともに、情報公開の状況を調査・公表。